

NEXT STAGE

下

星条旗の失墜と五星紅旗の破断

司武

N
E
X
T

S
T
A
G
E

下

星条旗の失墜と五星紅旗の破断

司
武

目次

4. 尖閣魚釣島
 5. シークレット アタック
 6. ドルの崩壊
 7. オーシャン ビレッジ
- .

主要登場人物

徳大寺重里抄…女性海洋エンジニア、オーシャン ライフ プロジェクトの推進者

木村一也…オーシャン ライフ プロジェクトのメンバーの一人、世界的な投資のプロ

藤原直哉…オーシャン ダイナミックのコンセプト クリエーター、プロジェクト リーダーの一人

優秀な海洋エンジニアでかつ優秀なソフト エンジニア

野口亘… 若手政治家、オーシャンライフ プロジェクトのメンバー

前田和義… 日本の首相

山本定行… 保守党の幹事長、のちに首相

リチャード トーマス… アメリカ大統領

ナジ ウィリアムス… 大統領首席補佐官

トニー ブラッセル… 安全保障担当首席補佐官

ロバート サマー… アメリカ海軍作戦部長

バリー スミス…アメリカ軍戦略軍司令官

ジョージ カーペンター…フェニックス軍需複合体の会長

竜南平…中国国家主席

林中広…中国中央軍事委員会副主席

陳華清…中国海軍長官

定同相…中国北海艦隊司令官

郭至善…中国サイバー軍司令官

4. 尖閣魚釣島

既にミサイル搭載型の原子力潜水艦を就航させ、性能は十分とは言いがたいが一応航空母艦も就役させた陳にしてみれば、中国の近海にこれらを浮かべるだけでは物足りない。自由に太平洋に出かけてアメリカの西海岸にいつでも行けるよと示威したい。我々の尖閣諸島を日本に支配されていけば宮古海峡の自由な航行の妨げになる。最近はその事あるごとに竜主席にも尖閣諸島の領有権をしっかりと内外に示すべきだと進言していた。それは竜主席の側近達にしてみれば迷惑な行動だ。

「陳同志、それは竜主席のお考えとは少し違いますか？」

海軍で竜主席の信頼ナンバーワンの葉海軍政治委員が、遠慮がちに陳に慎重な態度を促したこともある。「知ってるよ。」

竜同志が私とかなり違う世界観を持つてゐることは。

しかし、私は我々がそれほどまでに慎重にならなくて良いと思つてゐるんだ。

彼は慎重と言うよりも臆病なんじゃないか。」

陳はやや馬鹿にするような顔を葉にしてみせた。陳は葉が後で彼の表情の変化をも竜に報告するのを知つてゐる。しかしそんなことはもう気にもならなくなつてゐた。

「俺は自分の子供たちの力を皆に見せてやるのだ。」

竜にも分かるだろう。」

陳が一人ほくそ笑んでゐるのを葉が横で不安げにそつと見た。陳は葉など知らないアメリカの軍事専門家達とのチャンネルを持つてゐるんだと言つて自信を持つてゐた。もう30年も中国海軍に尽くして来ているのだ。その間、多くのアメリカの軍事関係者と会つてきたし軍事産業のボス達にもあつてきた。その中でアメリカの軍に大きな影響力を持つ、巨大軍事産業のボスのカーペンターとも直接会えるパイプを築いて来た。ジョニー・カーペンターは原子力潜水艦も製造するフェニックス・グループの会長だ。彼とはまだ40代の時からいろんなショーや会議の時に会つて来た。パリでもシンガポールでも。そしていつの間にか、陳はお互い特別の配慮をしよう仲になつてゐると思つてゐた。二人が親しくしてゐることはお互いの国の情報部門も良く知つてゐることである。しかしそれをお互いのトップボスが黙認して来たのは、お互いの利益になるはずとの考えからだ」と陳は解釈して来た。

陳は、すでに竜が林とのミーティングで尖閣への上陸演習を黙認したと、林から連絡を得ていた。実行はタイミングだけだ。

陳に実行を決断させた最後の一押しは、オーシャン ライフのデマ記事だった。

「オーシャン ビレッジ プロジェクトを尖閣で展開すると決定か？」

大東京新聞がナジの工作とも知らずに、怪しげな噂話を記事にした。

木村達はどうしてこんないい加減な記事が書かれるのか大迷惑だった。自分達は新しい文化バターンを作り出しているのだ。その邪魔をされたくはない。さっそくオーシャンダイナミックスの広報担当が大東京新聞に抗議したが、全く取り合ってくれなかった。

いつものようにその記事は中国に届いていた。それを陳が知った。彼はタイミングは今だと思った。放置しておけば日本が尖閣で事業を開始し、実効支配を世界に喧伝されます。彼は一気に尖閣に上陸する作戦の実行を決意した。

陳は身震いするほどの激しい興奮を外には出さずしつかり内に収めた。

同じ頃、トーマスとウイリアムスは山本の秘書の野口に託したレターで、前田と山本に自分の意思が十分伝わったはずと確信していた。トーマス達は工作がどんどん進捗しているのを確信していた。

9月に入った。メインの兵器ビジネスのミーティングでシアトルのボーイングの研究施設を訪れて、ちょうどテキサスの大邸宅に戻って来たフェニックス グループの会長のジョニー カーペンターに安全保障担当大統領首席補佐官のトニー ブラッセルから内密な電話がかかってきた。

「ジョン、

君の中国のお友達に、我々は君達と日本がお互いに自分のものだと言いつ合っている東シナ海の小さな島に君達が実効支配を試みたとしても、非難声明以上の行動は一切取るつもりがない、と再度言って安心させてくれな
いか。

前にも何度か言っているんだがね。

再度伝えて安心させてくれないかな。」

カーペンターはブラッセルが何を言いたいのか直ぐに理解した。

「トニー、陳は喜ぶだろうな。」

カーペンターは、トーマスがいよいよ行動に出ると決断したのだと理解した。早速カーペンターは陳と上海で会うイメージを作り、秘書にスケジュールを立てさせた。堂々とした体格で自信満々の陳の自信をさらにどう煽って行動に移させるか、自分の役割がさらに楽しくなった。アメリカの軍需産業界のボスが中国海軍のボスに親しく会うなんて、昔なら考えられないことだったろうなと思いつながら一人頷いていた。カーペンターは次の週の初めには上海の高級ホテル　ロイヤル　メリディアンのスイートにいることに決めた。

次の週、陳はカーペンターの招待を受けて上海で彼と最高のディナーを楽しんでいた。

カーペンターは最高の御世辞で陳の成果を褒め称えた。

「私はこんなに早く貴方がたの海軍がここまで強力になるとは思ってもいませんでした。

陳將軍のたゆまぬ努力の成果ですね。

世界にその雄姿を示すのも間もなくでしょう。

それだけの力を持った海軍ですよ。

われわれの海軍とすぐ互角になりますね。」

カーペンターは最大限の御世辞で彼の自尊心を擽った。そして肝心のフレーズを付けくわえた。

「私は個人的には貴方の海軍が上陸作戦を如何に素早く実行出来るか、その実力を見たいものですね。

貴国方はいろんな場所で国内演習されています。

まあ私のお友達のライスさんあたりは、場所によつては強烈なメッセージを出すでしょうが。

貴国が国内演習だとおっしゃる演習に対して、私の友人達は言葉以上の行動を起こしはしないと云えますね。」

カーペンターはキーフレーズを口にしながら、陳の反応をしっかり観察していた。彼は明らかにさらに自信を得

た事を示す目の輝き示した。

陳は内心の可笑しさをこらえるのが大変だった。

俺はもう尖閣への上陸演習の決行を決めているんだ。

カーペンターはそれに感じていないようだ。

俺を煽りにわざわざ上海までやって来たんだな。

「苦勞さんなことだ。」

ただそれでも、自分の海軍を非常に高く評価してくれているカーペンターの御世辞に気分が良かった。陳はカーペンターと上手い紹興酒を楽しみながら、次の日の予定を決めていた。カーペンターは陳の表情から、彼が既に作戦の実行を決めているのを確信した。

カーペンターは一晚、上海を楽しんで、翌日には上海空港からテキサス行き飛行機に乗っていた。テキサスに戻ったカーペンターは秘密保持が確立されている回線で、トニー・ブラッセルに陳の反応を直接伝えた。

カーペンターがテキサスに帰って行った次の日、陳は青島の司令部に向いて定に直接会った。陳は青島の基地が大好きなのだ。北京のオフィスにいるよりはずっと気分が晴れる。勿論、陳が好んでやるパフォーマンスの一つでもあった。

中国海軍のボス陳は中国海軍北海艦隊の司令官 定円相の性格をよく知っていた。彼は非常に慎重な男だが、一方で艦隊指揮の司令官として大きな実績を上げたがっていることを。ライバルの南海艦隊は最近南沙諸島周辺での活躍で注目されている。それに負けたくはないと思っているはずだ。

陳は定を司令室から外の芝生の庭に出ようと誘った。陳がオフィスの外に連れ出す時は絶対に秘密にしておきたいテーマを話す時に決まっていた。定も彼の司令室に党の盗聴システムがセッティングされていることを十分承知している。定は陳が何かいつもと違う話をしようとしているのだと理解して、外の美しく手入れされている庭に出た。9月の終わりだったが、外はかなり暑く湿度も高かった。それを陳は全く気にしないようだった。

「定同志、これは竜主席も密かに賛成している話だ。」

我々の島への上陸演習を速やかに実行する。

我々の固有の島への、L T 1， 作戦の実行だ。
日本人が厚かましく騒ぎ立てているけれども何も遠慮はいらないはずだ。

自分の庭で演習するだけだから。

単なる国内演習だ。
単なる国内演習だ」

陳が同じ事を二回も強く口にしたのが定には印象的だった。陳も自分に納得させようとしているのだ。彼が本気で実行せよと言っている。

「アメリカは我々の行動に何も物理的な反応をしない。

それは彼らの有力者が私に保証している。私だけでない。

別のルートを通して主席にも届いている。

アメリカはあんなチツボケな島のことでは我々と戦争する気はない。

今、日本は我々の島への上陸演習には何の用意もしていない。

我々の島だから当然だが。」

陳は国内演習だと言っている以上、何も日本を口に出す事はないと思いつつ日本を口にしてしまっていた。定は黙って陳の言うことを聞いていた。しかし陳が口にする前から、今日は何を命じるつもりなのか分かっていった。定にしても漸く自分の能力を國務院の面々に示せる絶好の舞台がやってきたと気持ちが高ぶっていた。それはどうやら陳も同じように思えた。

「以前から決められているいつもの演習だ。

我々固有の領土での単なる国内の上陸演習だ。

国外の誰にも文句を付ける権利はない。

我々の固有の領土内での演習だからな。」

陳はそこで少し間を取ってさらに続けた。

「定、実行スケジュールは出来ているはずだな。」

陳はまた、我々の固有の領土だ、と何度も言った。彼の高ぶりを感じ取れた。勿論、演習の実行スケジュールと内容はとくに作成されていた。定はそれでも主席の判断を知りたかった。

「陳長官、主席と副主席の意向はどうでしょうか？」

陳は即座に答えられた。前からその言葉を用意して来たのだ。

「竜は黙認だよ。」

間違つて世界の反応が予想以上に激しかったとき、俺をクビにして自分を守るためにな。

続きは
完成版で
お楽しみ下さい。